

# 令和7年度学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> <li>学校行事、生徒会活動や部活動などあらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>震災に係る復旧復興ボランティアなど、校外ボランティアの推進・支援</li> <li>地域貢献を目指した校内・各部・個人ボランティア活動の随時呼びかけ</li> <li>Google Classroom を活用した案内・募集</li> </ul>	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。</p>	<p>校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>75.2% C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】昨年度同時期との比較では2.5%の減少となった。校外ボランティア活動の呼びかけについては昨年度同時期より多く行っている。しかし、1学期に募集した中では、これまでも他の校外ボランティアに参加したことがある生徒が複数名いるなど、生徒の中でも意識に大きな差がある。また、部活動単位の前期校内ボランティアについても、行っていない部活動が多くあり、そもそもボランティア活動を全く行っていない生徒が多いと考えられる。</p> <p>【今後の対応】 現在、クラスルームでの呼びかけが中心となっているため、Classi など別のプラットフォームの使用についても検討する。また、担任の先生方にも協力していただき、ボランティア募集についてはさらに周知徹底し、ボランティアの必要性について生徒への理解を図る。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバルな視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和7年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業</li> </ul>	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。</p>	<p>ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>78.9% C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】1学期の探究活動では1・2年生でふるさとに関する内容を扱えなかったことが原因と考えられる。昨年度は震災があった関係でふるさとに関心が高い生徒が多かったが、今年度は時間が経ったこともあり、関心が下がった生徒が増えたと思われる。</p> <p>【今後の対応】2、3年生にかけて能登地域の課題、解決方法を考える探究活動を行う計画である。内容に関する調べ学習を行うなどして地元への愛着をより定着させたい。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>異文化交流の促進</li> <li>トビタテ留学 JAPAN などを活用した留学希望生徒への支援</li> </ul>	<p>【満足度指標】（生徒）</p> <p>異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。</p>	<p>4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>年度末に集計・評価を行う</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【現状】留学プログラムや、海外研修の募集を利用する生徒が昨年度より増加している。</p> <p>【今後の対応】今年度はトビタテ！留学 JAPAN を中心に留学する生徒が増加した。成果発表の場を設け経験を共有することで、より多くの生徒に関心を持たせる。</p>
学校関係者評価委員の評価		ボランティアの参加については強制できるものではない中で、ボランティアの種類や呼びかけ方を見直して、「感謝・思いやり・協力」といった心を育ててほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方針		震災復興系のボランティアだけでなく、校内の清掃ボランティアなど参加しやすいものから、町おこしのイベントへの協力など幅広い分野でボランティア精神を育めるよう様々なボランティアを用意し、提示方法についても工夫する。			

## 2 進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進し、主体的に困難な課題と向き合い考え抜く力を育成する。</p> <p>・生徒の可能性を最大限に引き出し、多様な大学入試制度の変化に対応できる進路指導を実践する。</p>	<p>・志を築くためのキャリア教育・東京大学主催の「高校生と大学生のための金曜 特別講座（オンライン）」の実施</p> <p>・PASSLAVO,ROJE,UTVC等外部教育支援組織との連携・全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底・学習時間調査・ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談・進路通信の作成</p> <p>・「GoogleClassroom 進路支援室」での情報発信</p> <p>・進路講演会・大学入試問題解法研究・習熟度別学習指導（週末課題）</p> <p>・スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導</p> <p>・金沢大学出張講座</p> <p>・多様な入試制度に関する研修会</p> <p>・保護者への進路説明会</p> <p>・学習計画の作成とチェック</p> <p>・志望校群別検討会（2年）</p> <p>・志望校検討会（3年）</p> <p>・出願校検討会（3年）</p> <p>・志望理由書の作成（1、2年）</p> <p>・批判的思考力育成</p> <p>・放課後学習会</p>	<p>【成果指標】（生徒学年別）第1志望に対して明確な理由がある。</p>	<p>高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して</p> <p>A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】</p> <p>&lt;生徒：1年生&gt; B &lt;生徒：2年生&gt; B &lt;生徒：3年生&gt; B</p>	<p>【判断基準】各学年目標1年120人（6割） 2年140人（7割） 3年160人（8割） Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】外部活動や探究活動に積極的に取り組めず、視野を広げられていない生徒もいる。そのような生徒への対処を検討する必要がある。高校卒業後のビジョンの明確さに差があるのが現状である。今後は志望校等、より具体的に自分の将来について語れるよう指導していく必要がある。</p> <p>【今後の対応】進路講演会等の行事をきっかけに「何になりたいか」だけでなく「どう生きたいか」「どう在りたいか」を生徒自身に考えさせる。その際、振り返りの中で、生徒の気づきを促し、主体的に考えさせ、それを成長につなげられるよう支援する。</p>
		<p>【成果指標】（1年生生徒）学習習慣を身につけ、学力を向上させている。</p>	<p>入学後、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【4月スタディーサポートから7月進研模試で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】</p> <p>&lt;生徒：1年生&gt; 140人以上 A</p>	<p>【判断基準】進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】学力GTZでC層は4段階程上昇と大きく伸びた。B層も2段階程伸びた。一方で、A・S層は伸びた生徒が39名に対して、1・2段階程落ちた生徒が27名となった。</p> <p>【今後の対応】進路目標と関連付けた学習計画を面談や集会を通して考えさせ、1年先を見据えた学習に取り組ませる。また、日頃の授業・小テストに加え、上位層には個別指導を計画的に入れていく。</p>
		<p>【成果指標】（1年生生徒）スーパー難関・難関大学入学に堪えうる学力を獲得している。</p>	<p>1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が</p> <p>A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】</p> <p>&lt;生徒：1年生&gt; 20人未満 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】スタサポから7月進研模試ではS層の人数が増え、例年並みになった。上位層は学校での学習や課題に上手く対応できている。</p> <p>【今後の対応】スタサポでS層だった生徒が一部A層に落ちているので、個々に課題を意識させ、7月進研模試でのS層には力を維持させつつ、A層に更なる力をつけさせる。特に基礎の漏れを無くすように指導する。</p>
		<p>【成果指標】（2年生生徒）学習習慣を改善するとともに、学力を向上させている。</p>	<p>2年次に、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度（3教科総合偏差値）】</p> <p>&lt;生徒：2年生&gt; 120人未満 C</p>	<p>【判断基準】進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】文系生徒では数学、理系生徒では国語の数値が伸び悩み、総合偏差値も上昇しなかった生徒が多い。</p> <p>【今後の対応】中位層の伸び悩みが大きな課題であるため、国数英の主要3教科への取り組み水準は下げずに、かつ、理社情の導入を並行して行うために、授業や課題以外の自主学習の取り組みを具体的にどうしていくかを、志望校決めなどの目標設定と合わせて行い、中位層の底上げを目指す。</p>

		<p>【成果指標】 (2年生生徒) スーパー難関大 学・難関大学合格 に向けた、高い学 習意欲と取り組 みを継続して行 い、改善できてい る。</p>	<p>1月進研模試3教科総合で学 力到達度(GTZ)のSラン クの生徒が</p> <p>A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>	<p>【7月進研模試3 教科総合での学力 到達度(GTZ)】</p> <p>&lt;生徒:2年生&gt; 20人以上 B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】1年1月進研模試の時よりも人数が減ったが、上位者 指導を受けている生徒については、変わらず高い学力を維持 している。 【今後の対応】上位層の個別指導は継続して行き、より高い学 力を身につけさせたい。教科バランスが不ぞろいの生徒や得 意科目が明確でない生徒もいるため、新たにS層まで伸びた 生徒についても、満遍なく実力を向上させることができるよ うに、個別面談などを行い、高い目標を持たせていく。</p>
		<p>【成果指標】 (3年生生徒) 生徒ひとりひと りが高い志望を 持ち、進路実現を 果たしている。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者数 が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p>	<p>【7月進研模試5 教科総合での学力 到達度(GTZ)】</p> <p>&lt;生徒:3年生&gt;</p>	<p>【判定基準】大学入試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】7月進研模試の結果(GTZ) 過去2年間と比較して、文系・理系ともに最も良好な結果と なった。好成績を牽引しているのは英語であり、理系では数 学も堅調である。一方、地歴や理科にはさらなる伸長の余地 が見られる。 【今後の対応】一般選抜に向けては10月記述・11月マークに 向けて生徒に科目ごとに2次重視か共通テスト重視か決め させ、「何を」「いつまでに」「どのような仕組みで」の観 点から取り組むべきことを明確にさせ、取り組ませる。また、 学校推薦型選抜や総合型選抜を戦略的に活用することを検 討する。</p>
			<p>難関10大学の合格者数が</p> <p>A 20人以上 B 15人以上 C 15人未満</p>	<p>スーパー難関大学 A 難関10大学 A 金沢大学 A 国公立大学 A</p>	
			<p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 30人以上 B 25人以上 C 25人未満</p>		
			<p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>		
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>職業によっては、就職試験で大学名や学歴などを全く見ない場合もあるため、高い志を持ちつつも、自分の中身をしっかりと積み上げて、自分の言葉で話せる人材の育成につなげほしい。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>進路指導については生徒の自由な進路選択を保障するため、大学名に縛られるのではなく、「自分が何をしたいか」「どんな学びを深めたいか」を基準に考えるよう促していく。</p>				

### 3 教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・「石川県教員育成指標」を踏まえ、教職に必要な素養、教科指導力、学級経営力、生徒指導力などの実践的な指導力の向上に努める。</p>	<p>・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</p> <p>・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 100% B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;生徒&gt;</p> <p>94.4 % B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】概ねスマートフォンの安全な利用方法について実践している。一方で、校内では放課後や休み時間等の不必要なスマートフォンの使用が見られる。非行防止教室や、集会の際に SNS の危険性・ネットトラブル防止については啓発活動を行っているが、サイバーパトロールにて SNS の利用状況について1件指導を受けており、まだ不安が残る状況である。</p> <p>【今後の対応】職員全体で今一度共通理解をし、全員で指導にあたっていけるようにする。生徒会執行部や情報委員など、生徒からもスマートフォンの安全な利用についての啓発活動を行い、スマートフォンの使用マナーについて考える機会を設ける。</p>
	<p>・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</p> <p>・予習・復習の呼びかけ</p> <p>・「探究」で培った指導法に関する研修及び情報共有</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」と答える生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」に関して、「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【7月実施第1回生徒による授業評価】</p> <p>81.1 % C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】昨年度の同時期より3.3ポイント減少し、特に国語で10.4ポイント減少した。現代の国語・論理国語・文学国語では、予習を課さず、振り返りも授業で実施することが多く、ポイント減少の要因の一つになっている。ただ、5教科全体としても、3.6ポイントの減少であり、更なる学習時間の確保が必要である。</p> <p>【今後の対応】2学期は、予習・復習（振り返り）に対する達成度が下がる傾向にある。国語・数学・英語の重要性を特に伝えるとともに、授業へのモチベーションが下がらないよう、声掛け・チェックを粘り強く行っていく。</p>
		<p>【努力指標】（教員）</p> <p>探究の要素を取り入れた授業を実践している。</p>	<p>「探究の要素を取り入れた授業を実践している」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;教員&gt;</p> <p>77.8 % C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】昨年度の同時期より11.1ポイント増加した。探究の要素をどの程度盛り込めば「探究の要素を取り入れた授業」といえるかの理解度がまだ不十分と思われる。</p> <p>【今後の対応】各教科で、「探究の要素」を取り入れるのに適した題材・単元・授業例を挙げてもらい共通理解を図る。「探究の要素」は短い時間でもよいとし、まずは全員実施することで、授業改善に活かしていく。</p>

<p>・校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</p> <p>・GIGA スクール構想に基づいて、1人1台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。</p>	<p>・若手教員のニーズに合わせたOJTの実施</p> <p>・Teams を利用した時宜をとらえた情報発信</p>	<p>【満足度指標】 (若手教員)</p> <p>OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより教員としての「知識・技能・指導力が向上している」・「やや向上している」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;教員&gt;</p> <p>93.5 % A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】情報の発信を積極的に取り組んだ結果となったと分析している。今後も情報収集と発信には努めていきたい。</p> <p>【今後の対応】総合力を高めるために、1つの分掌・1人の教員からでなく、様々な分掌・様々なベテラン教員が指導に携わる必要がある。そのような体制の構築を検討したい。</p>
	<p>・情報課やICT支援員による教員のICT研修の実施</p> <p>・好事例の共有</p>	<p>【努力指標】 (教員)</p> <p>Chromebookを生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している。</p>	<p>「Chromebook を生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 &lt;教員&gt;</p> <p>60.0 % C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】これまで曖昧だった「活用の頻度」に関する認識が、週1回・月1回など具体的な選択肢として提示されたことで、教員自身が「自分の活用は十分ではない」と自覚する傾向が強まり、結果的に自己評価が慎重になったと推察される。実技教科や端末活用が構造的に難しい芸術等の授業では、「主体的・深い学び」の実感が得られにくいことも要因として考えられる。こうした教科の教員にとっては、Chromebookの活用場面が限定的になり、自己評価にも消極的な影響を与えたと見られる。</p> <p>【今後の対応】Chromebookの活用促進に向けて、学年や教科に応じたモデル授業やテンプレートを整備し、すぐに使える教材環境を構築する。Google Workspaceを活用した協働活動や振り返りを取り入れた授業デザインを定例化し、生徒の思考の可視化と学びの深まりを図る。さらに、教員同士のペアによる相互授業参観と振り返り報告会を通じて、実践の幅と質を全校的に高めていく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>若手教員が多い中で、コーディネーター側も若手教員側も、双方にとって負担とならないよう、継続的に実施していけるような方法を模索してみようか。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>若手育成については有効な情報をうまく活用しタイミングをみて配信し、若手教員が時間のある時に閲覧できるようにすることで双方の負担を軽減していく。</p>				

#### 4 魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> <li>文理融合の視点で特色ある教育活動（SSH・NSH事業）を推進しその成果を全国的に普及する。さらに、小・中・高・大等と連携・交流を推進し、科学教育の水準向上を目指す。</li> </ul>	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への発信	【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。	本校の開発教材や報告書のダウンロード数が、前年度に比べて増加数が  A 1000件以上 B 500件以上 C 200件以上 D 200件未満	【成果指標】  年度末に集計・評価を行う	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【現状】SSHについては、今年度新しく掲載した融合プロジェクトポスターが平均98件(N=30)、理数科の課題研究論文が平均194件(N=10)、報告書が201件ダウンロードされており、これだけでダウンロード数は1000件を超えている。またNSHでは、ダウンロードが468件で昨年度より+37件である。
	物理チャレンジ、科学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの積極的な参加や応募の奨励	【成果指標】（生徒） 全国大会相当への出場が決めた個人またはグループ数が増えている。	全国大会相当への出場が決めた個人またはグループ数が  A 4以上 B 3 C 2 D 1以下	【成果指標】<生徒>  年度末に集計・評価を行う	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【現状】これまでに全国出場につながるような学会やコンテストには出場していない。 【今後の対応】9月以降の学会等の結果により判断する。
	英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の奨励	【成果指標】（生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し  A 入賞 4件以上 B 入賞 3件 C 入賞 2件 D 入賞 2件未満	【成果指標】<生徒>  2件未満 D	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】総文期間の出展のみの判定となるため、絶対数が少なかった。 【今後の対応】秋以降にも、ビジネスプラングランプリをはじめとした、各種コンテストに参加する予定である。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>アプリの活用</li> <li>AIを活用した効果的な学習方法の研究</li> </ul>	【成果指標】（生徒） 2年生のGTEC 12月受験でCEFR B1以上の生徒が昨年と同水準の人数である。	CEFR B1以上の生徒が  A 120人以上 B 110人以上 C 100人以上 D 100人未満	【成果指標】<生徒>  年度末に集計・評価を行う	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校の災害対応力を強化し、能登の創造的復興を目指して、ひと・もの・こととつながり、社会問題を解決する力を育む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門家による講話</li> <li>実践的な避難訓練の実施</li> <li>防災知識に関するセルフチェックの実施</li> </ul>	【満足度指標】（生徒） 防災教育を通して災害への備えに対する意識が高まったことを実感できる。	「防災教育を通して災害への備えに対する意識が高まった」と答える生徒の割合の合計が  A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	【7月実施学校評価アンケート】<生徒>  94.6 % A
学校関係者評価委員の評価	七尾高校の成果について、メディアを通して発信するなど今後もより一層広報活動に努めてほしい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方針	ホームページやインスタグラムを中心に、本校の成果をタイムリーに発信していくとともに、本校が独自で作成する情報誌の充実を図り、報道機関とも連携して七尾高校の魅力を発信していく。				

## 5 働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進めるとともに、「働きがい」を持って教育活動の質的向上に努める。</p>	<p>・情報共有のデジタル化 ・協業についての研修の充実 ・目標の明確化による達成感の共有 ・月2回の定時退校日を設定</p>	<p>【成果指標】</p> <p>観点1 時間外勤務時間の平均及び80時間を超える人数が減少している。</p> <p>観点2 ワークエンゲイジメント指標の平均が高まっている。 (UWES)</p>	<p>観点1-① 時間外勤務時間の平均が A 40時間以内 B 45時間以内 C 50時間以内 D 50時間を超える</p> <p>観点1-② 時間外勤務時間の平均が80時間を超える人数が A 3人以下 B 5人以下 C 7人以下 D 8人以上</p> <p>観点2 ワークエンゲイジメント指標(UWES)の平均が A 4以上 B 3以上 C 2.6以上 D 2.6未満</p>	<p>【毎月実施勤務時間調査】 &lt;教員&gt; 観点1-① 66時間 D</p> <p>観点1-② 17人 D</p> <p>【7月実施仕事に関する調査】 &lt;教員&gt; 観点2 3.3 B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 &lt;観点1&gt; 【分析】 年度当初の校務分掌業務に係る時間外勤務時間増加と、大型連休や総体総文前の部活動の遠征に係る時間外勤務が多い。これら双方が減少した6月は時間外勤務がやや少ない。</p> <p>【今後の対応】 情報のデジタル化と研修の充実により情報共有と協業化を推進し、個人にかかる負担を軽減する。併せて、長時間勤務による心身への負担を周知し、勤務時間縮減の意識が浸透するよう努める。</p> <p>&lt;観点2&gt; 【分析】 UWESの平均 4…世界的にみても高い平均値 3…日本における専門職の平均値 2.6…日本の平均値 において本校平均値は3.3であるが、内容の詳細としては、「熱心に取り組んでいる」ものの「幸福感」は低いとの結果であった。</p> <p>【今後の対応】 校務分掌におけるねらいを成果指標等により明確化することで、業務に対する達成度を分かりやすくする。</p>
学校関係者評価委員の評価		<p>頑張る生徒たち、先生については生徒たちを先生方が放置できないのが現実なのだと思うが、学校業務でもデジタル化やAIの導入によって効率化を図ることができるのではないかと。</p>			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	<p>今年度に入り、情報課が生成AIの活用についての研修や情報提供、業務で利用するネットツールをまとめた七高ポータルサイトの整備などを積極的に行っており、業務の円滑化と改善を図っているため継続して取り組んでいく。</p>				